

県退教協だより NO. 97

長崎県退職教職員等連絡協議会
長崎市筑後町二一 教育文化会館内
☎〇九五―八二二―五一九五

第333回合同学習会

11月6日、大村市の中地区公民館において退教協の当番で開催しました。開催に当たって、3月に退女教と打ち合わせをしました。今回は前半に情勢報告「教育を取り巻く現状」（上原貴之県教組委員長）と「今後の退教協組織の在り方」（上川剛史退教協会長）、後半に第31回の「高齢者として、人や社会、自然とどう関わり生きていくのか（生き様を語る）」というテーマを引き継いで、井上敏彦さん「石木ダム問題と関わって」と林直孝さん「自然保護と短歌」二人の発表とフリートークという2部構成で行いました。

参加者は、退教協は五島、壱岐を含めて全地区から参加して26人、退女教は17人、計43人でした。

前半は表題に沿ったペーパーが配布され、説明がなされました。後半の前半は井上さんの活動報告です。「長崎県と佐世保市が進める石木ダム建設事業の全体計画が旧建設省に認可されて50年が経過するが、未だダム本体の着工は、住民及び支援者の反対で行われていない。79年度完成予定であったこのダムは、今年度も含め工期延長が繰り返され、完成予定は2032年度末となった。計画から50年、治水、利水が目的のこのダムが本当に必要なのか地元住民や

多くの県民は納得していない。公共事業は「法にかない、理にかない、情にかない」ものでなければならぬ。住民が平穩に生活する自由を奪う公共性のないダム事業は中止すべきである。その実現のために微力ながら支援者の一人として、活動する毎日である」と。

後半の後段は林直孝さんの活動報告で、その内容を短歌で表現されました。「☆自然と環境（抜粋）では、正月に菜の花咲きてヒバリ鳴くをちこちに見る暖冬異変・能登の地に天変地異の重なりて 八百万の神あるを疑う・この星にあるものすべて遺産なり登録騒ぎを不思議に思ふ・ヒト族の勝手気ままの振る舞ひに大地は悶え大気は吠ゆる・いつよりか泥鰌目高に睦五郎 絶滅危惧にいずればヒトも・諫干に葬られたるシチメンソウこの佐賀の地の秋を彩る ☆世界と平和では、長崎の平和宣言聞きながら 千々にみだるる世界を思ふ ・高校生平和大使の夏きたる けはしき道を突き抜けて欲し ・大いに拒否権といふ宝刀の ありて平和はつねに置き去り ・ミサイルだ核兵器だと騒ぎゐて 終末時計は残り100秒 ・三度目の世界大戦せまりくる 許してはならぬ大国のエゴ ☆趣味の野鳥では、くづれゆく自然に鳴らす警鐘は 「人も野鳥も地球の仲間」 ・探鳥といふ趣味をもちいつかより 心待ちする冬のおとづれ ・パスカルの葦とはならず朝夕に 四季折を

り野鳥のオアシスなりし大干潟 田畑と化してその影を見ず 畏にかけ焼き鳥にして食べしわれ今は野鳥の保護を説きをり

発表後のフリートークは、参加者を3つのグループに分け、テーマに沿って行いました。残された時間が少なかつたので自己紹介と参加した感想に終わってしまつた感が強かつたですが、共通していたことは、集まつてお互いの元気をたえ、激励し、そして楽しく話すという、退教協・退女教の仲間としてごく自然で当然なことを、「そうだね」とうなずきあつたことです。



終わつて、地域に点在する仲間と時々呑み、自分や家族の健康（特に認知障害）、自公の悪政、自分の趣味、世界の平和問題、平和活動に対する支援（高校生平和大使へのカンパ）、地域の課題（石木ダム、諫早干拓、大規模開拓、原発、自治会）、集会の参加などを時間を余り気にせず話して、少しでも「残された時間」を長く引つ張りたいという思いを、主催した退教協として強く持ちました。なお、会場には、「こう生きている」というテーマに花



を添える形の初めての演出で、写真、絵画、草花の鉢植え、竹細工、短冊を持ち寄って、会場に展示しました。好評でした。

五者学習会

日退教組織交流集会報告

上川剛史

2024年10月10、11日、第30回五者学習会、日退教組織交流集会が東京のラポール日教済で開催されました。

五者学習会の基調報告の中で梶原日教組委員長は、まず「能登半島地震に関して日教組は独自に教育支援ボランティアを派遣している。今後も粘り強いとりくみを行う。」との決意を述べ、また学校現場の超勤の日常化、病休者、離職者の増加などの実態に触れ、「働き方改革が喫緊の課題である。」と述べました。最後に「平和憲法が最大の危機にある。平和の危機は教育の危機、教え子を再び戦場に送るなどの不滅のスローガンにこめられた決意のもと連帯してとりくんでいきたいと思います。」と力強いあいさつで締めました。記念講演ではピースボート代表の島山澄子さんが、この運動に関わるようになった動機(留学時に戦時下の体験のある旧ユゴの学生との交流)から顔の見える国際交流の大切さを体験をもとに報告しました。「戦争ではなく平和の準備を！」というガザからのビデオメッセージが印象的でした。

2日目の日退教の組織交流集会では冒頭平野組織部長から組織の現状が報告されました。24年の組織人員は初めて4万人を切ったが、今年度定年退職者がいない中で612人の新加入は各単会の努

力があつたと評価しました。ただ、2021年は4万5千あつた組織が3年後に4万を切るのは極めて危機的な状況です。全体会では大阪退教が役員30%以上を女性にする提言をまとめ、新たな役員体制で役員会の民主的な運営、情報の共有、単会代表者の民主的運営をスタートさせたという報告でした。「女性の役員を副会長でお茶をにごすのではなく、会長が事務局長になってもらう」、「男性は譲る勇氣、女性は受ける覚悟が必要」という意見も出ました。男女で構成している退教単会はその問題や葛藤を抱えながら活動していることを改めて知りました。分散会では、千葉県のリポート「千葉退教解散の危機的：」で、会長辞任、後継者不在、会員減少等の実態が報告されましたが、千葉県の現職は組織率が高く1万人以上の組合員がいるはずですが退教協は数十人、この落差に驚きました。しかし、根本的な問題は全国同じで今後各単会の工夫が試されるものと思います。全国いたるところで平和と民主主義実現のために活動している仲間がいることを改めて知り勇気づけられました。

被団協ノーベル平和賞受賞に寄せて

上川剛史

ノルウェーのノーベル委員会は10月11日、2024年のノーベル平和賞を日本被団協に授与すると発表しました。被団協の授賞理由は「被爆者たちによる草根の運動で、核兵器のない世界を実現するために努力し、核兵器が二度と使われないと証言を行ってきた。また、核兵器の使用は道徳的に容認できないという強力な国際規範が形成された。被爆

者の証言が唯一無二のものである」としています。1982年第2回国連軍縮会議で日本被団協代表の山口仙二さんがご自身の被爆で負傷した顔の写真を掲げ各国首脳に核廃絶を懸命に訴えた姿が思い起こされます。また、授賞理由の中で「彼ら歴史の証人たちは、それぞれの体験を語り、自らの経験をもとにした教育運動を展開し、世界中に幅広い反核運動を生みだし、それを強固なものにすることに貢献してきた」とも述べています。思い返せば、かつて長崎市教委は「平和教育」を否定し、原爆を原点としない「平和に関する教育」なるものを押し付け、我々退教協の先輩方の原爆を原点とする平和教育を徹底的に排除しようとしてきました。校長が図書室から「原爆読本」を撤去する事件も起こりました。どちらが正しかったか、それはこの授賞理由で明確になりました。

受賞の日、田中照巳代表委員は自らの運動の意義や経緯、被爆体験などを渾身の力で挨拶しましたが、日本政府に対しては「一貫して国家補償を拒み、放射線被害に限定した対策のみを続けている。」として繰り返して「死者に対する償いは全くしていない」と痛烈に批判しました。国家補償は過去の戦争の補償のみならず、未来の戦争を行わない決意につながるゆえに政府は拒んでいないのではないのでしょうか。

長崎では「被爆体験者」という行政区域の違いで被爆者と認定されない方が被爆者援護の入口にすら達していない方がおられることを忘れてはいけません。昨年の6月9日「反核9の日座り込み」が500回の節目を迎えました。毎回「被爆体験者」の方も参加されます。また、「高校

生平和大使」や「1万人署名」など若い継承者も着実に育ってきています。日本被団協に頂いた「ノーベル平和賞」はこれら反核平和運動を行うすべての人々へのエールだと思えます。今年には被爆・敗戦80周年。ウクライナ、ガザなど世界の紛争は絶えませんが、我々が原爆を原点とする平和運動をあきらめない限り、希望はあるものと信じます。

佐世保地域退協の活動

宮原 宏明

4月から翌年3月までを1年とする年度単位の活動をしています。

先ず、機関会議として、4月に総会を開き、4月と奇数月に計7回、午前に役員会、午後に班長会を実施しています。役員会は、このほか3回開催しています。班長会の後、各班長は、班長会のレジユメと資料を班員に手配りしています。しかし、平均年齢85歳の当地域では、手配り不可能の班があり、ほぼ4分の1の会員に郵送しています。

年間行事は、団結・親睦として、総会後と12月の忘年会、9月班長会後の「団結会」、1月班長会後の「旗開き」を行っています。独自行事として、5月に「健康づくりウォーキング」を行っています。2024年度は、九十九島パールシートの向かいにある長尾半島を往復しました。パールシートの中央広場を集合及び解散地にしました。伴走車を出した事務局長以外は全員バス利用でした。佐世保市は75歳以上には無料敬老パスが発行されるので、このような時には便利です。ちな

みに、事務局長以外はバス保有者です。10名ほど集まりました。ここには、日本では珍しいトビカズラが植生しています。自生地は、日本で3カ所が確認されているだけです。熊本県山鹿市相良の樹齢千年以上のアイラトビカズラ、九十九島のトコイ島、天草上島だそうです。この説明は、当時90歳(現91)のO氏から解説してもらったものです。佐世保に来る機会があったら、是非見に行ってもらいたいものです。ゴールデンウィーク辺りが花の見頃のようなです。

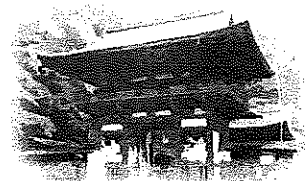
他団体との連帯行動として、毎月9日の「原水爆廃絶座り込み」、毎月19日の「19日佐世保市民の会平和行進」(3/1現在685回実施)、佐世保地区高間連の花見、趣味の文化展、研修旅行、学習会、輪投げ大会等各種行事があります。班長会でお知らせし、参加者を募っています。

ヨカ活動

「下條幹信先生を偲びつつ」

壱岐退教協 米倉 徹

はじめに、壱岐退教協の同志である下條幹信(みきのぶ)先生が1月8日92歳でご逝去されたことをお伝えします。長年県教組組合員として仲間と共に闘い、1993(平成5)年の壱岐退教協結成に尽力された一人です。晩年、島外研修では八幡製鉄所溶鉱炉の見学、国東半島、西彼杵半島巡りなど曲がった腰ながら精力的に歩かれていました。また食欲も旺盛で、温厚な性格、優しい語り口、残念でなりません。



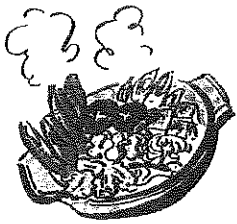
さて、2019年、「県退教協だより」に「復活！島内研修」島には学ぶものが多い」と題して寄稿し、島内研修が再開したことをお知らせしました。コロナの影響で一時中断したものの、これまで(1)南明寺住職による「壱岐の仏寺」では、仏教の真理や壱岐24の仏寺について学び、(2)壱岐退教協品川照三先生(2)の「壱岐四国四十八か所巡礼」では、先生の研究をもとに壱岐における巡礼の風習やその歴史について、(3)郷土史家伊藤由紀子さんの「壱岐の神社」では、千余りあるといわれる壱岐の神社の中で特に延喜式などに記載されている100余りの神社の祭神等について学び、(4)中原建設経営の「陸上フグ養殖場」の見学では、金魚とフグが同じ水槽で泳いでいる驚きから始まり、海の魚が高濃度の塩分に耐えていること、低濃度であれば魚はストレスなく育つこと、よって陸上フグ養殖が可能になったこと等を理解し、(5)観光農園「壱岐バナナ園」では、200本のバナナ栽培を見学。ここでのバナナ1本の値段は千円。皮ごと食するのだが、庶民の口には遠かったなど実施してききました。まだまだ興味ある事象がこの島にはあります。これからアンテナを張っていきましょう。壱岐退教協の活動の柱のうち一つは、島外研修です。しかし、企画した大分県臼杵への旅は欠席者が多く、この2年間実行できていません。下條幹信先生ともう一度島外研修に出かけたかったです。心よりお悔やみを申し上げます。

大東地区退女教の活動

富崎葉子

2024年度は、39名の会員でスタートしました。普段は、東彼・大村南・北と三地区に分かれ活動しています。5月に年1回の総会、他は、基本月1回（東彼は2回）集まって年間の計画のもと活動をしています。年々遠出が減り、もっぱらおしゃべりという名の安否確認+食事。23年度の報告から拾い上げますと、フラワーアレンジメント・食事会・調理実習・脳トレ・子ども科学館見学・健康体操・手芸・ウクレレ練習など、書いていると楽しくなりました。勿論、署名やカンパ集め、選挙期間は、それなりに協力しています。以前の取り組みで心に残っているのは「9条キルト作成」です。（2018年夏から2019年2月まで）材料集めから文字の下書きまで退教協の仲間も含め多くの手で完成しました。

昨年からは北地区では、食事と会話を主に行い、皆で昼ご飯を食べてから帰るようになっていきます。サンドイッチ・みそ玉・おにぎりなど簡単な調理実習、弁当購入。今年の2月は雑煮を作る予定。一緒に食べることで悩みや不安を分かち合い、「明日も頑張ってみようか」と前向きに。そして来月「また会いましょう」と。年齢も職場も異なる私たちが「反戦平和」を希求する「志」で何十年も繋がっています。これからの繋がりを力にしていって一日一日を歩いていけたらと思います。



2月の雑感

青木英夫

2月は一年中で一番寒い時ですが、長崎の人にとっては8月や10月と同じくらい楽しい月です。節分、立春、建国記念の日、天皇誕生日、ランタンフェスティバルと、おめでたいことが続きます。自分の場合も2月10日の誕生日で米寿を迎え、互助組合から長寿祝い金をいただきました。

長崎は、1日から12日まで今年で30回目のランタンフェスティバル（春節祭）。1万5千個のランタンが街中に吊され、「北の札幌雪祭り、南の長崎のランタンフェスティバル」と言われるまで有名になりました。

私事ですが米寿を迎え、めでたくはありますが、逆に多くの失敗や失礼をするようになりました。また、見知らぬ人の親切に感謝することも増えました。それとは逆に、人の世の種々醜い姿に怒ることも多い。バスや電車の中の若者の横着な態度や政治家の不正事件等です。

つい最近、思いがけない親切に感動したことが2つあります。1つはある大きな商店で若い男性店員の優しさに涙が出そうになったことです。もう1つはロソンで買った商品の代金を至急納入せよと通知が来たので、夕方遅く行くと、時を過ぎて倒れた書類を作ってくれました。それからコンビニのマルチコピー機で料金納入の操作ができずに困っていたら、若い女性の店員が来て、サッと打ち込んでくれたことです。

88歳の男は、あの若い男性とコンビニの女性店員の親切が忘れられません。

編集後記

編集委員 本多稔

6434人が亡くなった1995年の阪神大震災は1月17日、発生から30年が経ちました。私は9人兄弟の末っ子ですが、その当時、兄弟4人が阪神地区に住んでおり、3日くらい連絡が取れない兄弟がいて心配しました。幸いにも家屋の被害はあったものの、人的な被害はなくほっとした覚えがあります。その阪神大震災の発生から10日後、長崎においては全国の教研が開催されました。私は社会科分科会の会場係として参加していましたが、神戸からの参加者から被災状況の報告を受けて、被災地域の混乱ぶりに胸を痛めました。橋本環奈主演のNHKの朝ドラ「おむすび」でも重要な時代背景として取り上げられています。2月になって政府は7日、公立学校教員の給与増などを盛り込んだ教員給与特例法（給特法）の改正案を閣議決定しました。改正案では、教職調整額を2026年から毎年1%ずつ引き上げ、2031年に10%増額すると明記し、教員の残業時間削減に向けた計画の策定や公表を教育委員会に義務づけるとしています。23年度に精神疾患で休職した公立学校教員が、全国で過去最多の7119人に上ったことから分かるように、教職員の命と健康を守るためには「一定額働かせ放題」である給特法を維持したままでは困難です。昨年11月の段階では、残業時間に応じた手当を支払う仕組みを導入する案が関係省庁で検討されましたが、それが実現できないのは非常に残念です。この改正案では教職員という職業の不人気解消できないと危惧しています。現役と一緒に根本的な解決に向けて取り組んでいきます。